氏　　名	山本　洋平
学 位 の 種 類	博士（文学）
報　告　番　号	甲第３４４号
学位授与年月日	２０１３年９月３０日
学位授与の要件	学位規則（昭和２８年４月１日文部省令第９号） 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	Inner Wilderness: Thoreau and Pastoral Politique in Antebellum America 内なるウィルダネス―ソローと南北戦争前のアメリカにおけるパストラル・ポリティーク
審　査　委　員	（主査）千石　英世 新田　啓子 野田　研一（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻教授）

Ⅰ　論文内容の要旨

論文名…Inner Wilderness: Thoreau and Pastoral Politique in Antebellum America

（１）　論文構成

Introduction: Pastoralism to the Wilderness

Chapter 1　The Muse Speaks in Prose: The Anxiety of Influence in Thoreau's Earlier Works

Anxiety of Influence from the British Lake Schools

Emerson's Influence: Anxiety of "Self-Reliance"

Chapter 2　Wilderness as American Poetics in *The Maine Woods*

The Rhetoric of Wilderness in "Ktaadn"

From Pastoralism to Wilderness

Americanized Wilderness in *The Maine Woods*

Chapter 3　Animals and Race in *Walden*

Manifest Destiny in "Brute Neighbors"

Animals and the Native American

The Wilderness in Pastoral: the Ambiguous Animals

Chapter 4　Savages in the Market: Thoreau and Native Americans

Secularizing the Noble Savage in "Chesuncook"

Beyond Wilderness Ideology in *The Maine Woods*

Thoreau's Ambivalent Representation of Indians in "Economy"

Chapter 5　Domesticity and Wilderness: Thoreau in the Market

Walden, Slavery, and Work Ethics in Antebellum America

Pastoral Politique in *Reform Papers*

Conclusion: Beyond Wilderness Ideology

Notes

Works Cited

（2）論文の内容要旨

本論文は、Henry David Thoreau(1817-1862)の詩学と政治学をウィルダネス＝wilderness という概念を捉え直すことで再考することを目的としている。ソローを Emerson 思想の忠実な実践者であるとする従来までの作家像に代え、本論文は、ソローに、逆説に満ちたレトリックの使用者という特質をみいだし、新たな作家像を打ち立てようとしている。ウィルダネスは、荒野、あるいは手付かずの原野というイメージを含意する物理的空間を表す概念であるが、本論文では、これをむしろ逆説と境界侵犯性を秘めた多義的な概念であると捉え直す。そしてその多義性こそは、文明のなかに荒野をみいだし、また、北米東部に臨みながらそこに逆説的に北米西部的なるものを透視し、さらにまた、政治性のなかに詩学を織り込むことを可能とする。ソローにあっては、ウィルダネスの有するこうした多義性が、その複雑かつ先鋭的な想像力を導き出す源泉となっている。その文学的想像力を、本論ではパストラル・ポリティークと呼んでいるが、これを仮に直訳すれば、政治性に貫かれた牧歌となろう。

第 1 章では、第一作 *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* に組み込まれた詩作品を「影響の不安」(Harold Bloom)という視座から論じる。初期ソローに現出した英国ロマン主義およびエマソン的超越主義のダブル・バインドは、本作に複雑な葛藤の痕跡を残しているが、その葛藤ゆえに本作は次作 *Walden* への貴重な迂回路となりえたと主張する。第 2 章は、アメリカン・パストラリズムの批評的系譜を整理し、論文全体の理論的枠組みを提示しつつ、*The Maine Woods* の第一話“Ktaadn”を分析していく。この分析により、ソローは、観念的・言語的世界から物質的・現実的世界へ架橋しうる詩学を模索しえたと主張する。続く第 3 章では、ソロー作品の動物表象に注目し、それがいかに同時代の視覚的、言語的枠組みを乗り越えようとしているかを論じていく。ソローにとって、動物表象は、ネイティヴ・アメリカンをはじめとする人種問題への考察を導く触媒として機能していると指摘する。後半の 2 つの章は、ソローの詩学が政治学へと収斂する展開をさらに深く跡づける。すなわち、第 4 章においては、ソローの両義的な先住民表象が分析される。産業革命下で世俗化し、一般的言説からも周縁化されていったかに見える北米先住民であったが、ソローにおいては、先住民の存在こそが、全作品構造から見て、ソロー思想の形成に中心的な役割を担ったとされる。第 5 章では、従来、牧歌的世界を描いたと見なされてきた *Walden* であるが、そこには、実は、市場化・制度化する労働市場をめぐるエコノミクスこそが中心化されているとし、時代における労働市場にたいするアンチテーゼの書として *Walden* が位置づけられる。また、ソローの独自思想とされ、後世に深い影響を残すこととなった「市民的不服従」の思想も同様の位置づけを与えられるにいたる。以上の議論を経て、本論文は、ソロー文学における境界侵犯性と逆説性を前景化し、それこそがソロー文学におけるダイナミクスを生みだす原器であると結論する。

Ⅱ　審査結果の要旨

『ウォールデン：森の生活』で知られるアメリカ１９世紀を代表する文学者の一人 Henry David Thoreau をめぐっては、従来、自然愛好家にして、ラディカルな市民思想の実践者というイメージで語られることが多かったが、20 世紀後半以後、ジャーナルを含む全著作が順次公刊されるに及び、そのイメージは一新され、複雑かつ広範な自然観と社会観の追求者として捉えられるに至っている。とりわけ、その生態学的自然観の追求においては、20 世紀後半以後、世界的に浸透しつつある生態学的思想の大先達として位置づけられ、あらたな解釈を付与されるにいたっている。また、それに相即して、近年北米に勃興している文学傾向の一つたるネイチャーライティングの源泉のひとつとしてあらたに敬愛を込めて語られるにいたってもいる。本論文は、このようなソローに、新たな読解を付与せんとするものである。

英国ロマン派詩人とエマソンの超越主義哲学は、ソロー文学の胚珠であるが、ソロー文学とそれらとの比較を通して、ソロー文学の誕生に立ち会う著者の手際は、具体性を帯び、独自の視点を打ち出すことに成功しているといって良い。また、wilderness なる概念を従来の捉え方から一新することにより、すなわち wilderness を空間概念から解放して精神的・心理的概念へと読み替えることによってソローの文学が政治性との接点を見出してゆくという行論は、本論の重要な主張点であり、また、本論の白眉でもあるが、その行論は、慎重かつ情熱的に遂行され説得力を有しているといって良い。

文学と政治性が融合される方向性を求めるソローの思想は、南北戦争以前期における合衆国の具体的政治問題に対するソローの独自の立場を引き出し（いわゆる「市民的不服従」の思想や黒人奴隷制批判の思想）、また、独自の経済学的＝家政学的視点を付与する（『ウォールデン』における「経済」の記述）に至るのだが、その出発点として、ソロー自身が、自身に、詩人としてより散文家としての文学的資質を見て取り、その散文性において英国ロマン派的自然観を脱し、また、北米牧歌的自然観を脱し、しかし、散文によるポエジーを追求する立地点を獲得することを可能ならしめたとする立論は、ソローを思想家としてのみ定位するのではなく、文学者として詩人として捉える立場をも確保することになり、ソロー評価の重要な視点を打ち出したといえる。具体的には *The Maine Woods* の第一話“Ktaadn”エピソードに与えられる独得の評価がそれである。

本論文は、ソロー文学における wilderness 概念に新たな分析を加え、それを Inner Wilderness と定位することにより、生態学的自然思想家・ソローと文学者・詩人としてのソローを一元的に語りえた点が見事であり、独自の業績と認めることができる。

ただし、行論の途上、傍証として遂行される分析に不安定と見える所が１、２箇所見られ、この点を面接において質問したところ、指摘の点は今後の課題とし、新たな論文を準備するとの対応があった。質問者はこれを是とし、かつ、これをもって、かえって本論文の方向性の進展が期待できるという趣旨の発言があった。

以上、本論文は、今後のソロー研究の可能性を開くものであるといって良く、のみならず、現行のネイチャーライティング分析にも新たな視点をもたらす可能性を拓いているともいって良い。本論文に高い評価を与える所以である。